

### 第3回小倉特別講義および連携セッションの報告

小倉特別講義実行委員会

2023年10月24～25日、仙台国際センターにおいて標記の特別講義とセッションを開催した。本講義は、小倉義光・正子基金活用の一環として気象学会が2018年から開催している冠レクチャーで、新型コロナウイルス感染拡大のあおりを受けて4年ぶりの開催となった(小倉特別講義の趣旨は「天気」2018年5月号を参照)。講義は秋季大会2日目の授賞式後の時間帯に設定され、現地参加者は約400名、Zoomによるオンライン視聴者は約100名と盛況であった。

第1回小倉特別講義では、小倉義光先生に関わりの深いメソ気象学分野から Robert Fovell 教授、第2回は気象力学分野から Sir Brian Hoskins 教授、そして第3回となる今回は、モンスーン気象学および熱帯気象学の大家であるハワイ大学の Bin Wang 教授をお呼びした(第1図)。講義の題目は、「グローバルモンスー

ン：概念および外部強制応答と内部フィードバックプロセス(Global Monsoon: Concept and Response to External Forcing and Internal Feedback Processes)」で、講義と質疑応答はすべて英語で行われた。

Bin Wang 教授は、2015年にアメリカ気象学会で最も権威のあるカール・グスタフ・ロスビー研究メダルを授与され、WCRP/CLIVAR/アジア・オーストラリアモンスーンパネルの共同議長、WCRP/CLIVAR-GEWEX アジアモンスーン年の科学指導委員会等、数多くの要職を務められた。また35人の博士号取得者と30人の博士フェローを指導し、数多くの優れた気象学者を育成してこられた。

講義は、グローバルモンスーンの歴史的定義から始まり、モンスーンとハドレー循環・ウォーカー循環などの大気大循環や、赤道収束帯、地域的なモンスーン



第1図 Bin Wang 教授による講義の様子。

との関連性の解説がなされた。次に、地球温暖化に伴うモンスーンの変化について、熱力学応答と力学応答の複雑な相互作用に関する研究の進展を解説し、さらに内部フィードバックプロセスに起因するモンスーンの年々～数十年変動や、エルニーニョ・南方振動やマデン・ジュリアン振動（MJO）にともなうモンスーンの内部変動に関して、最新の研究成果を交えながら論じられた。

Wang 教授は日本国内に旧知の研究者が多く、講義の前後では再会の挨拶に訪れる多くの教授・研究者らが見られた。一方で、論文でしか知らなかった Wang 教授と直接話したがる若手研究者らが積極的に交流している姿も見られ、小倉特別講義実行委員会としても喜ばしいことであった。

Wang 教授による講義の翌日、小倉特別講義と連動する形で、小倉特別講義連携セッションを開催した。これは、海外からの講師に日本の研究状況を知ってもらうとともに、講義で扱った研究分野を概観することで学会活動を盛り上げることを意図したものである。セッションは、「熱帯気候の階層構造：積雲対流から大循環とモンスーンまで (Hierarchy Structure of Tropical Climate: From Convection to General Circulation and Monsoons)」と題し、モンスーン・熱帯気象分野を形成する様々な研究を精力的に行っている 5 名の中堅研究者が、セッションのテーマに沿う形で積雲対流、熱帯低気圧、季節内変動、季節変動、年々変動と時空間スケールの異なる現象に関する講演をそれぞれ行った。講演および質疑応答は全て英語で行われた。

最初に梶川義幸（神戸大・理研）が階層構造を踏まえた熱帯気候の概観を示すと共に連携セッションの講演者を紹介した。横井 寛（JAMSTEC）は観測データ解析から積雲対流システムと境界層熱力学の相互作用を示した。伊藤耕介（京都大）は近距離にある二つの台風による相互作用「藤原効果」について、数値シ

ミュレーション結果を基に 3 次元的な効果を紹介した。末松 環（理研）は雲解像モデルを用いた数値シミュレーション結果から、MJO の東進速度とウォーカー循環の関係を示し、現実的な MJO の再現には平均的大循環場の再現が重要であることを示した。一方、梶川義幸（神戸大・理研）は観測データ解析と数値シミュレーションからモンスーンのオンセットに対する熱帯擾乱の役割を示し、気候モデルにおける熱帯擾乱の再現性とモンスーンオンセットの再現性評価を行った。時長宏樹（九州大）は年々変動の主要モードであるエルニーニョの衰退年の熱帯低気圧活動の変化に着目し、その将来変化を示した。全ての講演後には多くの参加者から質疑やコメントが寄せられ活発な議論が行われた。ゲスト参加した Wang 教授からも質問やコメントが各講演者に寄せられた。また、Wang 教授からは「一つのセッションで多様な時空間スケールを横断的に扱ったこと」に好意的な評価を頂くと共に「有意義な時間を過ごすことができた」とコメントを頂いた。

後日行ったアンケートでは、回答者の 8 割から今回の特別講義を有意義であったという評価が得られた。コロナ感染拡大が収束したとは言え、まだまだ海外の著名研究者が来日して直接話してくれる機会は多くないため、学会員、特に学生や若手研究者に有益な講義を企画してゆきたい。次回の講師および分野については、会員からの声を参考にしつつ、小倉特別講義実行委員会で議論する予定である。詳細が決まり次第、学会ホームページ ([https://www.metsoc.jp/about/international/ogura\\_lecture](https://www.metsoc.jp/about/international/ogura_lecture)) やメーリングリストを通じてご案内するので、楽しみにお待ちいただきたい。なお、過去の小倉特別講義の動画は、会員限定で上記サイトからリンクされているので、参加できなかった皆様はぜひご覧いただければと思う。